

タ リ タ ・ ク ム

“Talitha, koum”

(マルコ5:41)

日本聖公会 正義と平和委員会・ジェンダープロジェクト

第 1 号

2005年 3月3日

発行人: 吉谷かおる

「だから言っておく。この人が多くの罪を赦されたことは、わたしに示した愛の大きさに分かる。」(ルカ7:47) ルカによる福音書7:36～50

司祭 山野 繁子 (東京教区)

「だから言っておく。この人が多くの罪を赦されたことは、わたしに示した愛の大きさに分かる。」(ルカ7:47) ルカによる福音書7:36～50には、イエスがファリサイ派のシモンという人の家に招かれて、食事の席に着かれているときのできごとが描写されています。

この時代の正式な食事の席というのは、高くないテーブルに左肘をついてよりかかり、体全体はソファに横たえるような格好で食事をするのだそうです。食事中に誰かが近づいてきて、足を濡らしたりぬぐったり、香油を塗ることは不可能でも不自然でもないことでした。旅をしてきた客のために、足を洗う水、ぬぐう布を用意することは、もてなし方の一つであったということです。

さて、このとき食事が始まると、この町で後ろ指を指されている女性がイエスの後ろに近づき、言葉もなかったイエスの足を

涙で濡らし、自分の髪でぬぐい始めます。それだけでなく、足に接吻をし香油を塗り始めます。その家の主人であるシモンは、きっとまゆをひそめてこの光景を見ていたでしょう。町中から「いかがわしい商売をしている女」として知られているこの女性が、「預言者」という評判のイエスの体に直接接触しているという事実に、シモンは仰天していたでしょう。イエスがこの女にどうという反応をされるかによって、シモンはイエスへの態度を決めようと内心思っていました。

ところがイエスが最初に反応を示されたのは、この女性に対してではなくシモン自身に対してでした。金貸しから借金をした二人の人の話を、イエスはシモンに向けて語られました。多額の借金をした人と少額の借金をした人が、両方とも返すことができなくなり、その借金を帳消しにしてもらったとき、「二人のうち、どちらが多くその

金貸しを愛するだろうか」という問いはシモンに向けられた問いでした。これまでシモンの歩んできた人生で重要な関心事は、自分の正しさと清さを守り、他者から自分を汚されないように保つことだったかもしれません。反対にこの女性が歩んできた道は、周囲の人びとのさげすみの視線による自己嫌悪とあきらめ、自分や他人への怒りや恨みにさいなまれながら、なおどこか心の奥底に一筋の光と真実を求め、一片の希望を探していたのではないのでしょうか。その一筋の光と真実を彼女はイエスの許で見いだすことができたのであり、そのことへの喜びと感謝を表現するために、あの行為があったのではないのでしょうか。この場面はイエスを中心として、シモンとその女性の人生がはっきりとあらわにされ、向き合わされた瞬間だったように思われます。イエスが女性に「あなたの信仰があなたを救った。安心して行きなさい。」と言われ、彼女が立ち上がり、その場を立ち去ったとき、彼女は大きく変えられていて、それは光と喜びを抱いた新しい出発となったのではないのでしょうか。

ところで、この物語は教会の歴史の中で、伝統的に「罪の女がイエスに赦される物語」として扱われてきました。この女性はマグダラのマリアなのではないか、マグダラのマリアは元「売春婦」なのではないか、この時イエスに赦されて弟子になったのではないか、というとらえ方が定着してきたのだと言われています。わたしたちは「もう一つのとらえ方」をすることができるのではないのでしょうか。「罪の女」と言われていた女性が、イエスを通して神の圧倒的な愛と憐れみに触れ、自分の思いと周囲からの決めつけの両方から自由にされ、自分自身をかけがえのない尊い存在として取り戻した物語なのではないのでしょうか。それはイエスご自身が、彼女の悲しみを自分自身の悲しみとされ、その行為によって自己を表現した彼女の人生と尊厳の全体を回復してくださったことを表しているのではないのでしょうか。

(これは、2004年6月13日横浜教区藤沢聖マルコ教会での説教をもとにしたものです。山野繁子)

意思決定機関への女性の参画に関して

大阪教区主教 宇野 徹

日本聖公会第53(定期)総会決議第15号の「意思決定機関への女性の参画を検討し、実施する件」は、日本聖公会各教区が教会委員・教区会信徒代議員・常置委員・総会代

議員に、女性が一層選出される方策を検討し、実施する。なお、各教区はその結果を次期総会に報告する」ということになり、今総会において各教区の報告がなされた。こ

の2年間に各教区において女性の意思決定機関への参画が飛躍的に伸びたとは言えない状況にあります。小さな教会においては男性信徒が殆どいないために教会委員の人数が男性よりも女性の方が多い。しかし、信徒代議員や常置委員、総会代議員になると、圧倒的に男性が多くなっています。この現象は教会員の3分の2が女性であることを考える時に、意思決定機関への女性の参画について女性自身の自覚を強く求めざるを得ないように思います。イエス様は社会の隅へと追いやられ、虐げられていた病人や貧しい人達、子供や女性といった小さくされていた人達に関わり、その人達の視点に立って物事を見つめておられたのであります。このようなことを考える時に、教会の福音伝道・宣教には女性からの視点により強く求められます。男性は企業において能率や効率を求められ、競争と弱肉強食という論理に支配されており、この企業の

論理が教会の中に持ち込まれて来ているように思います。そして、教会が大きくなることが目的であるかのように考えられてしまう傾向があります。即ち、教会が経済的に安定させ、大きくなること、強くなることを目指すために、貧しく、弱い、無力な者への関心が見失われてしまう危険性を持っており、社会の片隅に追いやられていた人達へのイエスの関わりや視点を見失ってしまうことにもなります。現代社会においても女性や子供、しょうがい者や高齢者、貧しい人達等が弱い、いと小さな立場に置かれ、虐待や差別を受けております。このような状況において女性からの発言が重要な役割を持っております。この状況を男性が大いに学び、自覚しなければならぬと同時に女性自身も自分達の置かれた状況の問題点を強く自覚され、大いに発言されることを期待しております。

I A W N

International Anglican Women's Network

聖公会国際女性ネットワーク

聖公会国際女性ネットワーク (IAWN) は、聖公会の国際的なネットワークの一つです。1996年11月に設立され、日本聖公会からは、吉村登志子さんが出席されました。このネットワークの基金は、イギリスの「マザーユニオン」と「アメリカ聖公会婦人会」からの拠出によって賄

クレア・ガルダ

われています。

この IAWN の諸活動は、聖公会中央協議会 (ACC) に公式に報告されており、世界の聖公会女性の皆様に、IAWN の諸活動に積極的に関わって頂くことが期待されています。

IAWN の目的は、IAWN が何か直接プロ

グラムを担うというより、むしろ、世界の聖公会女性を、郵便やインターネットなどを通して結びつきを深め、世界にある女性の組織が担っている諸プログラムを相互に報告しあうことです。

IAWN は、民族、性別、年齢、言語、文化、教育、経済、性的志向如何の違いを超えて活動しています。基本的には、祈りと相互のコミュニケーションを通して、教会における女性の地位や役割を支持したり、励ましたりすることです。また、女性の立場から諸問題に答えたり、聖公会中央協議会やランベス会議を通して、教会の中における女性の関わりが変革されるための擁護活動もしています。

1996 年の IAWN 設立会議で、吉村登志子さんは、このネットワークによって、

日本聖公会の女性信徒の関心が高まることを期待しています。

クレアさんより

(旧ジェンダー委員会メンバー)

私は、クレア・ガルダ、イギリス出身です。1996 年 10 月に来日、名古屋学生青年センターと愛知聖ルカセンターで英語の教師として奉仕しております。日本聖公会正義と平和委員会・ジェンダー委員会のメンバーになってから、より一層ジェンダーに興味を深まり、私自身の自覚が一段と高まって参りました。聖書に登場する女性の中では、アンナが好きです。私と違って、忍耐強いからです！

2005 年 2 月 28 日～3 月 11 日にニューヨーク国連本部で開かれる第 49 回国連女性の地位委員会主催の国連女性会議に IAWN (インターナショナル・アングリカン・ウィメンズネットワーク) のメンバーとして、日本での窓口である山野繁子司祭とジェンダープロジェクトのメンバーである大岡左代子さんが管区より派遣されます。10 年前に示された女性の地位向上のための行動要領「北京行動計画」が各国でどのように実施され到達しているのかを確認しあう会議です。日本の国にとどまることなく、世界規模での女性同士のつながり、連帯をうみだすきっかけとなるようお祈り下さい。

ジェンダープロジェクトの活動についてお知らせします!!

2002 年に発足した日本聖公会正義と平和委員会・ジェンダー委員会は、第 53 定期総会后、名称を「正義と平和委員会・ジェンダープロジェクト」として、チャブレン高地敬主教とともに活動を再開しました。

このプロジェクトは、まずは 2006 年夏に「日本聖公会女性会議」(仮称)を行うことをひとつの到達目標としてつくられ、現任のメンバーの任期は 2006 年総会までの予定です。

ジェンダーの課題はいろいろな分野にわたっており、会議を開いたからといってすぐに課題を克服できるわけではありませんが、ひとつの大切なプロセスとして開催する予定です。また、その他以下のようなことをジェンダープロジェクトとして活動したいと考えております。プレ・女性会議

(2003年夏に開催)でご希望の多かった「出前ワークショップ」では、メンバーが各地に出向くことによって、多くの方々とも少しでも思いを共有したいと願っています。みなさまからのお声かけをお待ちしています。

(大岡左代子)

<活動予定>

- ・ ニュースレター『タリタ・クム』の発行
- ・ ML(メーリングリスト)の開設と運営
- ・ ジェンダー問題に関するパンフレットの発行
- ・ 出前ワークショップ(初級編～上級編まで準備中)
- ・ 「ジェンダーコント集」の発行
- ・ 海外の情報の翻訳(ジェンダーに視点をあいたワークショップのアイデアや礼拝式文など)
- ・ 「日本聖公会女性会議」の開催(2006年夏)

ジェンダー一口メモ 「ジェンダー」って何???

最近よく聞くこの言葉。でもちょっとわかりにくいですね。

「ジェンダー」は、もともとは文法用語でしたが、「セックス」が「自然的・生物学的性差」をあらわすのに対し、「社会的・文化的性差」を意味する言葉として1970年代頃からこの「ジェンダー」が用いられるようになりました。たとえば、妊娠・出産という機能は「セックス」に属するものですが、男子たるもの妻子を養うべし、という見方は「ジェンダー」にかかわるものとして区別することができます。たしかに男と女はからだの構造は違っているけれども、「男らしさ/女らしさ」の規範は社会がつくったものなのだから、そんな「らしさ」とらわれずに生きていける(ジェンダー・フリー)社会に変えていこう……。このような文脈で「ジェンダー」という言葉が広まり、役所の文書(たとえば男女共同参画社会の実現に関するもの)にもしばしば登場するようになりました。一般には、男女の固定的な役割分担(なぜいつもおじいさんは山へ柴刈りに/おばあさんは川へ洗濯に行くのでしょうか?)を批判する場面で使われることが多いようですが、政策課題を論ずるにも、学問研究の場においても、いまや「ジェンダー論」を避けて通ることはできません。教会では、というと・・・あまり話題になっていないかもしれませんがね。(吉谷かおる)

斎藤美奈子著『物は言いよう』(平凡社 1,600円＋税)

昨年は、酒井順子著『負け犬の遠吠え』(講談社、2003年、1,400円＋税)が大ヒットし、話題を呼びました。これは子どものいる既婚者をとくに羨ましいとは思わない、という視点から書かれた本だったのに、そこが伝わらないまま「負け犬」という言葉が一人歩きを始めてしまったのは残念なことでした。それと小倉千加子著『「赤毛のアン」の秘密』(岩波書店 2,000円＋税)、これも昨年のヒットです。日本での晩婚化現象を『赤毛のアン』を愛好する女性の多いこととの関連から解明しようとするもので、『アン』を読み耽ったことのある人は必読! 実はこの本を紹介しようかと考えていたのですが、年も改まったことすし、文芸評論家・斎藤美奈子さんの新刊をお薦めすることにします。斎藤美奈子さんの本は『妊娠小説』、『紅一点論』など、どれも面白いので、すでに熱心なファンという方も多いかと思いますが、アカデミックな、あるいは主義や運動としてのフェミニズムからは少し距離をおきつつ、いつもジェンダーに関する問題意識が根底にあり、それを誰にでもわかるようにきちんと論じているところが魅力です。

『物は言いよう』はジェンダーにかかわる問題を正面から扱ったまさに待望の一冊です。実用書の体裁を意識したとのことで、「思わぬセクハラ発言を回避するためのマ

ニユアル本」と銘打たれています。昨年は、福田官房長官(当時)の「男は黒豹」発言が印象的でしたが、「男はそのくらい元気がなくては」的発言も見られ(集団暴行事件に対してですよ)、政治家の暴言が繰り返された年でもありました。本書はこういった著名人の発言から60の実例を挙げて、セクハラ性を見破る難易度別に「思わず失笑をさそう天真爛漫なご発言」「つつい納得させられる粉飾上手なご発言」「いっけん進んで見える油断大敵なご発言」に分類しています。これらの発言のどこが差別的なのか、どのように論理的に破綻しているのかを論じる著者の手並みは鮮やかで、溜飲が下がること請け合いです。本書で取り上げられている発言じたい多くは抱腹絶倒もので楽しめるのですが、なかには著者も自戒して述べているように、うっかりすると自分でも使ってしまいそうな、ヒヤリとさせられる言い回しもあります。個人的には、「女に生まれてソンだと思ったことがない」と言う人に違和感を抱いていたのですが、そういう人の精神構造がわかった。それとジェンダー・フリーという考え方に対する風当たりが強いのは「多様性を認めよう」という趣旨が理解されず、「性別をなくそう」という考えだと誤解されているためであることもわかり、腑に落ちました。まだお読みでない方は、ぜひご一読を!

正義と平和委員会・ジェンダープロジェクトは、教会におけるジェンダー問題の共有と女性たちの新しいネットワークづくりのために、機関紙として、ニュースレター『タリタ・クム』を発行することになりました。年3回から4回の発行を予定しています。

女性の方々はもちろん、ひとりでも多くの皆様にこのニュースレターを読んでいただけたら幸いです。(ジェンダープロジェクトの働きについては4～5頁をご参照ください。) また、よりよい紙面にしていくために、皆様のご意見やご感想をお待ちしています。今後ともどうぞよろしくお願いいいたします。

ジェンダープロジェクト・スタッフ一同

スタッフ自己紹介

ジェンダープロジェクト

大岡左代子 (京都教区)

国連女性会議に参加のためニューヨーク出張中につき、代わって吉谷が紹介いたします。ふだんは幼稚園の先生、日本聖公会婦人会役員としても活躍中の、スリムなのにパワフルなさよこさん。帰国報告がとっても楽しみです。

木川田道子 (京都教区)

去年「世界遺産」に登録された和歌山県の「熊野古道」のそばに住んでいます。今、地域の女性たちによる農産物加工の仕事を立ち上げようとしています。農業や女性起業に関心ある方、よろしければお便り下さい。(教会ってどういうわけか農家の人が少ないのよね……。って私が出会わないだけ?) これからこの『タリタ・クム』を通していろいろな方と出会えることが楽しみです。吉谷編集長のもと、楽しい企画ができたらいいなあ、と思います。どうぞよろしく。

松原恵美子 (大阪教区)

女子中高生とのたたかひの日々を送りつつ、自分らしく生きることがむずかしい、他人との関係をうまく築けない彼女らに、授業を通してエールを送っています。

三木メイ (京都教区)

京都教区・聖職候補生として、大津聖マリア教会に主日勤務。平日は同志社大学キリスト教文化センター所属の専任講師兼チャプレンとして働いています。女性と教会の問題に関わって早15年ほど。まだ続いています。

吉谷かおる (神戸教区)

『タリタ・クム』編集長。北海道出身、岡山市在住。仕事は非常勤講師で、趣味はヴァイオリンの練習と、面白い映画や小説を人に薦めることです。短髪でたいていサングラスをかけています。今後とも『タリタ・クム』をどうぞよろしく!!